

第3回 第二期武蔵野市スポーツ振興計画（仮称）策定委員会 議事録

日 時	令和3年6月30日（水）18:00～20:00
場 所	武蔵野市総合体育館3階視聴覚室
出席者	【委 員】◎松尾哲矢委員、○石黒えみ委員、秋本清委員、櫻井昭委員、河合雅彦委員、藤田勝敏委員、鏑邦宏委員、多田てい子委員、前川洋司委員、新野雅史委員、古賀祐輝委員、田中博徳委員、樋爪泰平委員 ※◎委員長、○副委員長 【事務局】武蔵野市教育委員会生涯学習スポーツ課 【事業者】株式会社創建（計画策定支援事業者）
欠席者	1名（鈴木健太郎委員）
傍聴者	0名
次 第	1. 開会 2. 議事 （1）武蔵野市におけるスポーツの価値と定義 （2）第二期武蔵野市スポーツ振興計画（仮称）における基本理念 （3）武蔵野市のスポーツを取り巻く現状と課題 （4）今後のスケジュール案 （5）意見交換
資 料	資料1 武蔵野市におけるスポーツの価値と定義 資料2 第二期武蔵野市スポーツ振興計画（仮称）の基本理念 資料3 武蔵野市のスポーツを取り巻く現状と課題 資料4 今後のスケジュール案

1. 開会

事務局より、開会の挨拶を行った。

2. 議事

(1) 武蔵野市におけるスポーツの価値と定義

事務局により、資料1に基づいて説明を行った。

委員長 内容としていかがか。

委員 (全員承認)

委員長 それではこの内容で進めていくこととする。次の議題へ進みたい。

(2) 第二期武蔵野市スポーツ振興計画（仮称）における基本理念

事務局により、資料2に基づいて説明を行った。

委員長 内容としていかがか。

委員 p2の「第六期長期計画」の基本目標である「①多様性を認め合う」の「多様性」の指す意味がとても広い印象を受ける。基本理念では、「性別、年齢、障害の有無」と記載しているので、前半の説明でも「多様性」という言葉は使わずに、「性別、年齢、障害の有無」と具体的に示した方が良い。

委員長 資料のタイトルにあるスポーツ振興計画という言葉について、確かに、以前はスポーツ振興法に基づき「振興」という言葉を使っていたが、上から押さえつけるイメージを持たせてしまうため、市民が自発的に活動する支援を行政が行うという意味合いの「推進」という言葉が使われることが多い。

副委員長 「振興」という言葉は主導、先導という意味合いが強いため、自発的な活動、自主性を後押しするためにも「推進」という言葉が使われてきていると思う。ただいま事務局から示された基本理念と照らし合わせると「推進」という言葉を使うと良いと考える。
1点、基本理念である「市民の誰もがスポーツを楽しみ生活を送り続けられる 武蔵野市」というフレーズを考えた理由があればお聞かせいただきたい。

事務局 他自治体の計画や市の別の計画をみると、計画書全体の土台なる基本理念に基づき施策体系を展開しているところが多く、フレーズで示すとわかりやすいと考えたため新たに設けた。

副委員長 確かに、全体的にわかりやすく方向性を示せるのでとても良いと考える。原案のまま進めていただければと思う。

委員長 一つ視点として国際的な関係性の広がりもある。第3期スポーツ基本計画では、社会、世界、未来とつながる、となっており、未来につながる視点が少し弱い印象を受ける。基本理念のフレーズを直すということではなく、自分が元気になり、周りの人も元気になる。さらにその輪が広がり、国を超えて広がっていくという考え方を計画全体に示せると良いのではないか。多様性の広がりが見えるようにしていくことが大事である。また、未来につながる場所としては、SDGsという言葉が盛んに注目されている。この意味合いと未来軸がどのようにつながるのか。さらにデジタル、5Gなどの視点も入ってくるだろうと考えている。10年、20年後の充実したライフスタイルを視野に入れたものを全体として含んでおいた方が良いと考える。トイレを一例にあげると、国立競技場のトイレは男性・女性のピクトグラムが並んでいる。これは性別に境界線を設けないという意味を表しており、このような新しい考え方が重要になるのだろうと考えている。

ただいま事務局から示されたこの基本理念の考え方でいかがか。

委員 (全員承認)

委員長 それではこの方向で進めていくこととする。次の議題へ進みたい。

(3) 武蔵野市のスポーツを取り巻く現状と課題

事務局により、資料3に基づいて説明を行った。

(4) 今後のスケジュール案

事務局により、資料4に基づいて説明を行った。

(5) 意見交換

■ ささえるスポーツ

委員長 従来、依頼型のボランティアが中心となっていたが、神戸市で開催された1985年のユニバーシアードにおいてボランティアの募集を試みたのが、自発的なボランティアを募る募集型の始まりである。また、1994年の阪神淡路大震災のボランティア活動も注目されたが、自発的なボランティア文化はそこまで長い歴史があるわけではない。一方で、スポーツボランティアという文化や風潮が定着している部分も一部にはある。以前、委員の方からご発言のあったサポーターズクラブのような取組も含めて、ぜひ今後の取組の方向性についてご意見をいただきたい。

また、指導者の在り方も問われるべきである。指導者はボランティアで支えられてきた。しかし、今後もこのままボランティアで継続するのか。この論点も重要と考える。

委員 武蔵野市スポーツ推進委員協議会では、昭和の日に毎年、総合体育館や陸上競技場などでファミリースポーツフェアを開催している。今年は亜細亜大学のゼミの学生やスポーツボランティア HANDS の方々に手伝ってもらう予定であった。通常、私たちがお手伝いするのは時間的に半日くらいかかるものが多い。一方で参加しやすい環境を整えるのであれば、運営側には負担がかかってしまうが、2～3時間くらいで気軽に取り組めるような仕組みをつくり、参加できる人を発掘することが重要ではないか。どのような組織であっても、新しい組織に参加するのはとても勇気が必要で、参加に対する敷居を低くしていくことが大切だろう。また、スポーツ指導者においても同様で、指導者向けの体験会も必要と考える。スポーツをささえる方を増やしていくためには、指導者やコーチのための体験会も必要ではないか。

委員長 するスポーツの中では行動変容の考え方を導入しているが、ささえるスポーツの中であっても行動変容の考え方を導入すると良いと考える。関心期、実行期、継続期という段階に応じた支援が重要で、ボランティアに対しても、指導者に対しても、このような考え方を取り入れると良いのではないか。

委員 私も以前、ボランティアをやろうと思ったことがあったが、実際にはやらなかった。それはやはり参加の敷居が高かったからである。ボランティアを募集する時には、誰を対象としているのかを絞っていただけるとわかりやすいし参加しやすい。例えば、未就学児向けのスポーツイベントであれば、幼稚園のお父さん・お母さんの参加を促すなど、関係のある人にターゲットを絞ってもらえると参加しやすいのではないか。

委員 私の日頃の活動を踏まえると、ボランティアは意外と集まっている印象を受けている。コミセンを借りる時に、お手伝いとして見守りをお願いしたいというボランティアを募

集したところ、意外と集まった経験があった。その時は社会福祉協議会を通して募集をかけたが、そういうボランティアだったらやっても良いかなと考える人もいないのではなか。募集してみると、意外と集まるのではないかなと思う。

委員長 募集方法に課題がありそうな印象を受ける。ボランティアのことを理解している、わかっている組織を通して募集する方法もあるのではないかな。

委員 ささえるスポーツは難しいキーワードとして捉えている。ボランティアをやりたい気持ちがある方はかなりいる。来てくれた方をいかに離さずに、継続していただくかが重要。そのためには、ボランティアの方々に有意義だった、楽しかったと思わせることが重要で、受け入れ側がどのような体制をとれるかによって広がっていく。

委員 私の団体はスポーツ関係の団体なので手伝う意識の高い人が多い。しかし、漠然と募集してしまうと、そのような方たちであっても参加の敷居が高いように思えてしまう。先程のご指摘の通り、ターゲットを絞るなど募集方法を工夫すれば意外と集まると考えている。

また、監督やコーチについてはそもそも興味がないと担い手になることは難しい。募集して集まった方たちをいかにつなぎとめておくことが重要だろう。

委員長 頼まれればやるが、自分から進んでやるのは日本人独特の特徴として難しいかもしれない。スポーツをささえる人材を集める入り口の仕組みが重要である。

委員 私は 10 年間サッカーのコーチをやっていた。コーチになった経緯としては、私自身サッカーの経験があり、子どもがクラブに加入したためであった。土日祝日はほぼコーチの活動で埋まり、私は会社経営をしていて時間の融通が利いたのでコーチをできていた。他にもボランティアでコーチをやっていた父親もいたが、子どもの退団とともに父親も辞めてしまった。子どものスポーツチームの指導者を継続してもらうことは本当に難しい。昔は学校教員が担っている部分もあったが、今はそのようなケースはほとんどなく、実際の活動ではボランティアに強いられる負担が大きい。時間的制約があまりにもあり過ぎるので、無給でやっていくのは難しい。足抜けがなかなかできず、継続は本当に大変。

委員長 日本とアメリカのスポーツ指導者を対象としたアンケート調査を実施した時に、決定的に異なる結果だったのは、日本人は自分が教えている意識が強い一方、アメリカ人は自分の生活を壊してまでやるものではないという意識が強いということだった。だからこそ、誰かが休んでも回るように 3 人体制で運営する仕組みを構築していた。担い手が互いに休み合えるような仕組みづくりに目を向けるのはとても重要である。

委員 無関心の人に関心を持たせ、関心を持っている人をどのように実行させるのか、ささえるスポーツの推進が大切である。例えば、子どもの場合、ボランティアに関する部分では、その機会を与え、そこで得た経験をもとに次につなげ育成する。同様の視点から、イベントの主催者側が短い時間でもよいので、様々な場面を想定してボランティアの機会を提供することが重要ではないか。ボランティアを体験することで達成感を得て、継続意識の醸成につなげられるのではないかな。ただ、その一方でボランティアの継続性は難しく、適切な役割を与えていかないと達成感が得られにくくなってしまう。大きな大会などでボランティアを体験するきっかけを与え、育成し続けていくことが重要なのではないかな。

委員長 子どもの頃からのボランティアの経験が少なく、お互い支えあって、というところが弱いのではないだろうか。ボランティア文化を定着するために、子どもの頃から体験してもらうことが大切なのではないかな。

- 委員 現状の部活動では、まずは自分がスポーツを実施することが先で、ささえるスポーツとしてのボランティア意識は弱い。学年が上がると支える意識が芽生え始めるかもしれない。
- 委員 以前、子どもの頃に所属していたチームに戻ってサポートしてくれる大学生が何人かみられる。ただ、その大学生たちがチームに戻る時に、知らないコーチばかりだと戻りにくく参加しづらくなってしまう。自分の教えた子どもが年齢を重ねて指導者として戻ってくるという循環は上手くいくと思うので、長くコーチを担える環境づくりが重要である。
- 委員長 まさに循環型のスポーツライフというキーワードもある。
- 委員 確かに、指導者を長く続けていると自分のキャリアを終えた選手が戻ってきてくれるケースがある。それはきっと楽しい思い出がある人たちが戻ってきてくれるのだと思う。まずは、今所属している子どもたちに、チームを楽しいと思ってもらえることが重要である。ちなみに、亜細亜大学の学生はどのようなモチベーションでスポーツ推進委員に立候補しているのか。
- 副委員長 亜細亜大学の学生は、やはりスポーツに何かしら関わりたいという気持ちが強い。また、今後の社会人となる上で貴重な経験となると考えて立候補する人がいる。活動の意義を大学生なりに感じ取って立候補しているのだと思う。
- 委員長 以前実施した調査では、大学生の2～3割はボランティア活動に参加している結果が出ている。人のためになりたいという気持ちを持っている大学生は一定程度いる。中学生、高校生、大学生などがスポーツボランティアに参加できる仕組みを構築できると良いのではないか。
- 委員 私の組織は、サッカーとラグビーの2つの種目を展開している。サッカーは上位組織が盤石なので、ささえる人材の募集をかけるとすぐに集まり、「指導者を本業でやりたい」という人が集まりやすい傾向がある。一方、ラグビーはそのような体制ではない。志のある一部の人しか集まらない。ほとんどがボランティアである。一応、資格制度はあるが、有資格者と無資格者が混在しており、束ねる人もいない。種目によって指導者の集まり方、育成方法が異なっていると感じている。
- 委員長 武蔵野市で指導者の研修は行われているのか。
- 事務局 市では体育協会において実施している。
- 委員長 指導者を育成するには一定の質を担保する必要がある。
- 委員 体育協会の指導者講習会は、募集すると各種目受講者が集まる。コロナ禍であってもリモートで実施しており、修了証を配付している。
- 委員長 市として指導者の資質をどのように担保し、さらに持続的に学ぶ仕組みをどのように入れ込むのかということを考える必要がある。
- 委員 指導者を教える機会を設けると良いのではないか。人との基本的な対応、コミュニケーションなどの共通事項に関する研修がスポーツ推進委員協議会でも開催できれば良いと考える。
- 委員長 ハラスメントは絶対に許されないため、種目横断型で今体育協会が実施している研修等を継続、充実していただければよいと思う。
- 副委員長 ここの委員のような核となる人材を育成する一方で、すべての人がそのスキルを持っているわけではないという認識も重要である。子どもが地域スポーツに加入する時に、親の覚悟が必要ということもよく聞く。何かを手伝わなければならないというのはボラン

ティアではないと思う。以前の関連調査では、ボランティアを実施している人のうち、3割程度はやらされてやっているという結果が出ていた。このような人たちのことを踏まえると、持続可能なささえるスポーツの環境づくりは難しいと考えてしまう。ささえるスポーツの人材の確保に向けて、ボランティアという考え方だけではなく、地域の企業、民間スポーツクラブもあるため、そのような組織・団体との連携も考えると良いのではないか。

委員長 ささえるスポーツの主体を考えることも重要である。

委員 無償であれ、有償であれ持続可能であることが重要である。競技として、産業として持続させるため、選手を辞めても関われる場があるというのは重要。日本では総合型クラブが定着しない一方で、ドイツが上手く定着しているのはボランティアがうまく機能しているからである。ただし、ドイツと日本では労働時間の差や文化・風土が異なる背景も起因している。コロナ禍は新たな文化・風土の定着に追い風であると考えている。テレワークなどのように、新しい仕組みや文化をこのような情勢の中で定着できると良いのではないか。

委員長 これまでは無償のボランティアの傾向があったが、経済産業省を中心として地域スポーツクラブ産業を創ろうとしており、所得格差による障壁が生じないような仕組みにチャレンジしているところである。教え合いの「公」ではなく、「私」の領域において支えていくといった新しい領域が展開できるのではないか。これは計画書に「連携」「協働」という言葉、「多様な人が支える」というキーワードが出てくるかもしれない。

■障害者スポーツ

委員長 障害者スポーツという言葉はあるのか。また、障害者スポーツという言葉を使う時に、障害者スポーツとして楽しまれている種目を指すのか、健常者と障害者問わずスポーツに親しむことを指すのか、障害者がスポーツに親しむことを指すのか曖昧であるため、この言葉の使い方には留意が必要。私たちが考えなければならないのは、これまで残念ながらあまりスポーツに親しむことができていなかった「障害者」のスポーツ参加をどう高められるのかということを重視したい。また、日本障がい者スポーツ協会では、今年3月に示したビジョンの中で「障害者スポーツ」という言葉を無くし、「パラスポーツ」に統一しようとする動きもあるが、本計画における取り扱いをどのようにするか。

委員 確かにその言葉の問題を上手く解決しなければならないと考えている。10年先を見据えた時に「障害者スポーツ」という言葉を使っていない可能性はある。障害の有無に関わらずということ意識しているのであれば、「障害者」という言葉の特筆するのかどうかということが論点となっている。ボッチャやサウンドテーブルテニスなどは障害者スポーツと認められやすいが、卓球なども障害者が実施するわけで、障害者という言葉を使わず、高齢者などと同様に、障害のある人が実施するという意味合いくらいにしても良いのではないか。

委員長 障害者がいかにスポーツに親しむかどうかが議論はとても重要で、さらに施策体系の大きな柱に出すかが論点となると考える。

委員 市のこれまでの取組・評価における障がい者スポーツ教室では、障害の「害」の字を使わずに「障がい」としている。また、私共の事業団でも動画を配信しているが、障害者が視聴していることを見据えて配信しているわけではなかった。

委員 東京都障害者スポーツ協会では、障害の害の字は漢字を使っており、東京都に準拠して

いるからである。これは計画書の策定主体である武蔵野市が決めていただければよいと思う。また、私たちも動画配信については障害者に特別な配慮をしているわけではない。特化することを意識する必要はなく、皆さんがやっていることと障害のある方がやっていることはそう変わらない。配信されている動画を視聴して、各自で立ってやる、座ってやる、ゆっくりやる、と応用していただければよいと思う。

委員長 障害の「害」の字は東京都が法律用語で漢字を使っているが、一般的には「障がい」という言葉を使っているケースが多いのでその方が良いかもしれない。法律に関する部分は漢字で進めていければ良いと思う。

その他

事務局より、次回の会議日程について説明を行った。

- ・次回は8月25日（水）18:00 から開催を予定している。

以上